☆　小学生の部〈特　選〉

やまんばばあさんみたいに　なりたいな

合川北小学校　三年　土　田　楓　子

やまんばばあさんってすごい人だ。

車よりも足が速い。だって、村の人が病気でたおれたときに、車よりも速いスピードで病院につれて行った。やさしいね。わたしもクラスで一番になることがあるけど、そんなに速かったら心ぱいしなくても、運動会ではゆうしょうできる。それに、スキー大会だって、ぜったいにほかの学校の人に負けないと思う。うらやましいな。やまんばばあさん、わたしだけに走り方教えてくれないかな。

やまんばばあさんは、こもりがじょうず。カラスの赤ちゃんをへびから助けた。わたしは、へびがきらいだから、つかまえるなんてとてもできないな。カラスの赤ちゃんを助けてあげられないかもしれない。やまんばばあさんは、赤ちゃんをしっかり守ったね。こわくても、赤ちゃんが大事だから、へびをたいじしたんだね。さすがだな。

やまんばばあさんは、りょうりを作るのがじょうず。遊びに来た友だちのおもてなしのために、魚のにつけも、つけものも、なべもぜんぶおいしく作る。わたしも、お母さんの仕事がいそがしいとき、おにぎりとかホットケーキやたまごを使ったりょうりは作るけど、つけものはつけれないし、魚のにつけも作れない。きっとやまんばばあさんのりょうりはおいしんだろうな。

でもね、わたしのおばあちゃんもりょうりを作るのがうまいんだよ。家では、「あやしいもの」とおばあちゃんが言って作ってくれるのが、すごくおいしんだ。それに、お母さんがふだん作らない、いろいろなりょうりをパッパッと作ってくれる。おばあちゃんがいるときは、いつもすごくごうかな食事になる。

おばあちゃんは、秋田市から電車で二時間もかかるのに、一週間交代で秋田市とわたしの家とを行ったり来たりしている。ものすごくはたらき者で、年をとっているのに、わたしの家の畑仕事も速いスピードでやってくれる。家の中では、ちゃわんをあらったり、せんたくをほしたりして、次から次へと仕事をするから、とってもたすかっている。

なんだかやまんばばあさんとうちのおばあちゃんは、とてもにているところがあるんだね。わたしがやまんばばあさんとおばあちゃんが一番にているなと思ったところは、いつもだれかのためにいっしょうけんめいはたらいているところだよ。だから、車よりも速いスピードで走れるし、とくべつにおいしい物も作れるし、家の仕事も、もうスピードでかたづけるし、きけんな目にあっても大事な子供を守ったりしてがんばれるんだよね。

わたしも、やまんばばあさんやおばあちゃんみたいに何でもできる人になりたいな。そのひみつは、きっと、だれかのことを思ってはたらくっていうことじゃないかな。わたしも、友だちや家族のことを大切に思って、何でもできる人になれるようにがんばるよ。

〈講　評〉

とても楽しくて夢いっぱいの本と出会いましたね。すごいパワーの持ち主、やまんばばあさん。やまんばばあさんのパワーは、「だれかのために働くこと」と気づくことができた楓子さんもすごいですね。富安陽子の他の本も読んでみてください。

仲間の大切さとは

前田小学校　四年　岸　野　菜々子

シュパッ。

バスケットのボールがリングをくぐる音。私の学校は、三年生から部活動が始まります。入れる部活動が少ないので、女の子のほとんどはミニバス部に入ります。私は、このシュパッ、という音が気持ちよくて好きです。だけど、小さくて目が悪い私には、この音をなかなか出すことができません。仲間の出してくれる音が楽しみで、毎日部活に行っています。

主人公のケイイチは、バスケットのゲームで遊んでいるうちに、本当のバスケットがやりたくなり、工事中のグラウンドにある、一本だけのバスケットゴールで遊び始めたことが、バスケットをやるきっかけでした。練習をしてシュートが入るようになり、仲間が集まり始め、男子のミニバス部が誕生しました。その時、足の不自由なケイという転校生がやってきました。

ケイイチは、ケイの体のことが気になり、遊びにさそうことができません。ケイは、ケイイチ達が楽しそうにバスケットをするのを見ていました。そして、シュート練習を始めます。それを知ったケイイチは、ケイをミニバス部にさそいました。走ることのできないケイは入部しました。他の人達は、ケイをじゃまものと思っていました。それを変えたのは「男女合同シュート大会」です。練習をがんばったケイが三位になったからです。みんながやっとチームの仲間としてみとめてくれたようでした。そして、大会の決勝戦。最後の最後でケイがコートに立ち、ケイのフリースローで勝ちました。ケイやチームメイトでも、ずっとシュート練習をがんばってきて本当に良かったと思いました。

私がミニバスをやっているわけを考えました。いっしょにが

んばれる友達がいて、苦しいことがあっても助けてくれる仲間がいるからだと、この本を読んであらためて思いました。バスケットは、チームプレーを大事にする競技です。チームワークを必要とするので、自分のことばかり考えず、他の人のことを思いやる気持ちをわすれてはいけません。キャプテンであったケイイチは、こんな気持ちだったでしょう。私は、今の仲間を大切にしていきたいと強く思いました。そして、私はケイとはちがい走ることができます。でも、シュートは上手ではありません。この本の中にでてきたバスケットの神様が言いました。

「自分だけのチャンスを持って、それを活かせ。」

自分だけのチャンスを作るためには、これだけは自信があるというプレーを身につけなければいけません。その一つとして、ケイと同じように少しでも多くのシュートが、かく実に入るように練習をがんばろうと思います。シュパッ、という音が、私もたくさん出せるようにあきらめません。

〈講　評〉

日々取り組んでいる部活動と重ね合わせながら、熱心に読み進めたことが伝わってきました。

ケイイチやケイの心情に寄り添ったことは、ミニバスを続けている今の自分を振り返るよい機会になりましたね。

仲間への思い、練習への思いを新たにし、これから目標に向かって頑張っていこうとする強い意志が感じられました。

自分らしく生きること

鷹巣南小学校　五年　堀　部　綾　乃

主人公の吾一が、決してよいとはいえない環境で育ちながらも、自分らしさを見つけていくところに、私は心を動かされました。

吾一の父は、自分が起こした訴訟事件に吾一の貯金を使ってしまう人、母は体が弱いながらも内職で家計を支えている人です。幸せな家庭環境とは言えません。ずっと中学校に行きたいと思っていたのに、吾一は母のことを思い、進学をあきらめて働くことを決意します。家の事情で中学校に行けないことを友達からからかわれる吾一。まだ十二才の吾一が家のために働きに出るなんて、私は涙が出そうになりました。今の日本は法律により、中学校まで進学することが義務として定められています。吾一を思うと、現代の私たちは当たり前のように学校に行ける、恵まれた環境に育っているのだと強く感じました。

また、吾一の就職先は友達の秋太郎の店でした。次野先生に教えてもらった「この世に吾はひとりなり」という意味のほこりある名前の「吾一」が、「五助」に変えられてしまいます。また、先輩からのいじめ、親しかった秋太郎や妹のきくからの冷たい態度。吾一はどんどん追いつめられていきます。私はこんなこ

とがあってよいのか、と腹が立ちました。さらに、もともと体の弱かった母は無理をして、亡くなってしまいました。母のそう儀にも来ない父を吾一は情けなく思います。私は、両親がいない吾一は、これからどうやって生きていくんだろうと心配になりました。私には、大切な人を失った悲しみはまだ分かりませんが、その悲しみは計り知れないと思います。命の尊さと大切な物は、吾一のように失ってから初めて気付くのかもしれません。

しかし、吾一はそのままではいませんでした。それまで胸の中で温め続けてきた思い、「東京に行く」という固い決意を実行しようとしていたのです。父の借金があって母だけを残して行くことはできなかったが、母を失った今こそその時期が来たと考えたのです。東京に行けば自分にしかできないことがあるのではないか、という吾一の動かされない決意を、私はとてもかっこいいと思いました。

私は、学校の統合で、今までの十倍の人数で学校生活を過ごしています。大勢の中にいると周りに流されてしまい、私らしさがなくなっていくような気がしています。自分の意見をしっかりもち、何事にも積極的に取り組んでいきたいのになかなかできません。そんな私に、「路傍の石」という題は、「道ばたの石のように、同じような物がたくさんあっても、一つ一つちがう形で同じ物は二つとないように、自分はこの世で一人しかいない。だからこそ、自分にしかできないことをするのだ。」と、語ってくれた気がしました。

〈講　評〉

名作といわれる路傍の石を読んでくれたことをまず、うれしく思いました。今と違う社会情勢の中で成長していく吾一の生き方を読みとり、「かっこいい」と思ったことをよく表現できています。自分の生活と考えあわせながら大切なことに気づいた綾乃さんの気持ちが作品の結びに出ています。

プロへの一歩一歩

米内沢小学校　六年　神　成　大　夢

平成生まれのぼくは、野村克也さんの現役時代を知りません。名捕手、三かん王をとった強打者だったと言われても実感できません。ただ、かんとくとしてのすごさは、楽天をクライマッ

クスシリーズに導いたことからもわかっていますし、それ以前にも弱かったチームを率いては優勝するということがあったことをこの本で知りました。

ぼくは野球が好きで、四年生から野球にうちこんできました。これまでに野球に関係する本をたくさん読んできました。これからも野球を続けるつもりで、目標はもちろんプロ野球選手です。

五年生の秋から自分たちが主力のチームになりました。背の高いぼくのポジションはファーストでしたが、本当はファーストは好きではなかったのです。ショートやサード、外野手をやりたかったのですが、自分の理想と現実には大きな差がありました。このことについては野村さんも、「野球がチームプレーである以上、自分の思うようになることはほとんどない。」と述べています。文句を言わず、チームのために自分を生かすことをこれからも考えてプレーしていこうと思います。

六年生の今年、ぼくたちは、地区優勝を果たし、目標としていた全県出場を果たしました。ふり返ると、チーム内のライバルの存在が、それぞれのレベルアップにつながったのだと思います。ぼくのライバルは、エースで三番を打っていた石田君です。ある大会で、ぼくも石田君もホームランを二本ずつ打ちました。バッティングや走塁ではいい勝負ができたと思いますが、守備力はぼくをはるかに上回っていました。さらに、彼は客観的に自分のプレーやチームのプレーを見ることができるので、データ野球で有名な野村さんのような存在になれるかもしれません。ぼくも冷静な判断力をもっと身に付けていきたいです。

この本の帯に、「リーダーで人と組織はこれほど変わる」と書かれていました。以前読んだ本にも、松坂投手が小・中・高でいいかんとくに出会ったから今の自分がいるというようなことを述べていました。プロになるほどの選手なので、自分の才能や努力が実を結んだのはまちがいないと思いますが、かんとくや周りで支えてくれた両親や地域のみなさんのおかげであることが両方の本に書かれていました。ぼくも、今のかんとくに出会ったおかげで野球が好きになり、努力を続けることができました。自分が野球のことを真剣に考え、まじめに努力してきたから、かんとくの言うことが理解でき、野球がますます好きになったという部分もあるかもしれません。「素直な選手は伸びる」かんとくも野村さんも言っています。いろいろな人のアドバイスを素直に吸収し、努力を続け、プロを目指してこれからもがんばっていきます。この本を読んで、プロにまた一歩近づけた気がします。

〈講　評〉

自分の心が成長すると、本が語りかけてくる言葉のもつ意味がより深く理解できるようになります。

野村監督の言葉と大夢さんの体験との交流が素直な文体で表現されていて、読む人を引きつける心地よい感想文でした。

さりげない引用も作品に深みを与えていますね。

☆ 中学生の部〈特　選〉

幸せだらけの日常

合川中学校　二年　小　野　千賀子

「みなさんに明日が来ることは奇跡です。それを知っているだけで日常は幸せなことだらけであふれています。」

千恵さんはそう書き残しています。

乳がんと闘い、二十四歳の若さで長島千恵さんは亡くなりました。私たちが毎日普通に生活している時間は何とも思いませんが、本当はとても幸せでありがたいことなのです。千恵さんが言っていたように明日が来ることはすごいことでそう思うと日常は幸せなことだらけです。もしも明日に自分がいなければ、今生きているこの時間はとても幸せだと思うし、今やっていることも幸せだな、と思ってきます。私はあの言葉から千恵さんは毎日を大切に生きていたんだと思います。そして、生きている時間が幸せだったからそのような言葉を書き残したんだと思います。

千恵さんは「余命一ヶ月」と言われてから三十七日間頑張りました。その三十七日間千恵さんを支えた人たちもすごいと思いました。

千恵さんは死ぬ前にウェディングドレスを着てみたいと言い、そのためにいろいろな人が協力したのがとても感動しました。千恵さんの彼氏の太郎さんと友人の桃子さんは、なるべく早く着させてあげるためにたくさんの結婚式場に電話をかけ、やっとウェディングドレスを着させてあげれることになりました。太郎さんはサプライズで写真をとるだけでなく結婚式をあげることにしていました。余命一ヶ月と言われていて、これから一緒に暮らしていけないかもしれないのに結婚することはとても勇気がいると思いました。そして、何よりも太郎さんはすごく千恵さんのことを愛していたんだな、と思いました。千恵さんは絶対に嬉しかったと思います。私もみなさんも人の支えがなければ生きてはいけません。千恵さんも桃子さんや太郎さん、他にもいろいろな人の支えがあったから病気にも前向きに頑張れたんだと思います。私もいつも周りにいて支えてくれている家族、友だち、たくさんの人たちに感謝をし、私もいろいろな人に感謝される人になりたいです。

もし、自分が病気で後一ヶ月の命だったらと思うと私はとても怖いです。みなさんもそう思うと思います。いつもなら長く感じる一ケ月が短くてどんどん過ぎていく時間がもったいなくとても大切に思えてくるでしょう。千恵さんは亡くなる最後まで自分の病気を治そうと闘いました。がんはいろいろな所に転移していて、私がこの本を読んでもがんの怖さ、そして痛さがとても伝わってきました。その怖さ、痛さを直接体験したことはないけれど、相当辛かったと思います。千恵さんはすごい心

の強い持ち主だと思いました。

千恵さんはお母さんも乳がんで亡くしていました。その時、千恵さんは中学三年生。私は今、中学二年生です。千恵さんは毎日、学校へ行き部活から帰って来て家では炊事洗濯などをやり、さらに勉強、ピアノなどの習い事。今、部活と勉強の両立を目標にしている私にとって毎日お母さんがやってくれていることまで全てやるなんて私にはとてもできません。私はこの本を読み、千恵さんをすごく尊敬しました。

私はこの本を読んで二つ思ったことがあります。一つは命の大切さです。私はいつも思うことがあります。千恵さんのように病気で生きたくても生きられない人たちがいるのに自分で命を絶つ人がたくさんいます。一つしかない尊い命をどうしてそんな粗末にするのか。私たちはとても小さな確率で生まれここに居ることは奇跡なのです。千恵さんは生きているという幸せ、明日が来る幸せを教えてくれました。これからの人生の中で何があるか分かりませんが「命」がある限り毎日の人生を大切に生きたいと思いました。

もう一つは、誰かに支えられて生きているということです。千恵さんもたくさんの人に支えられていたから病気に前向きに立ち向かえたんだと私は思います。友人や家族は私にとっていなければならない存在です。きっといろいろな面で助け合って支え合って生きているからだと思います。これからも友だちや家族を大切にして感謝して生きたいと思います。

「明日が来ることは奇跡。」千恵さんが書き残した言葉を忘れずに日々を生きていきたいと思います。

〈講　評〉

「命」という重みのあるテーマについて、自分の身に置き換えながら深く考えることができました。これからも「周囲の人々の支え」への感謝を持ち続けてください。

リラックスしている友達
鷹巣中央小学校
6年　吉　田　慎一郎

☆ 高校・一般の部〈特　選〉

私にとっての『それでも農は命綱』

七日市　佐藤利子

『それでも農は命綱』この本は、〝百年に一度の大凶作〟といわれた、平成五年のあとに書かれた本です。

あの年、長雨と低温のため稲は受粉できず、その後の天候も不順だった為、私達農家は天を仰ぎ、晴れる日をひたすら祈った…。

そしてコメが消え、消費者が行列を作って国産米を買い溜めたことによるコメ騒動。そして輸入米来襲フィーバーの顛末…。

私は生れて初めて食べたタイ米の〝あのなんとも言えない感覚〟それを生涯忘れまいと思って、本棚に飾ってありました。

今回また読み直した訳は、めまぐるしく変わる状勢の中で、自分にとって〝農のあり方を、いま一度見つめ直す〟時期ではないかと思ったからでした。

私は三十三年間農業を営んできました。ですから作者の山下惣一氏と同様に、稲は私にとっての源流であって、それ以上に著者はある理由から、尊敬以上の存在の方でした。

その山下氏が、ミカン農家としての専業路線を変更せざるを得なかった戦後農政。

そして平成五年版『農業白書』の概要を伝えた、当時の新聞のタイトルが、〝輸入と備蓄で安定供給〟となっていた事。コメから自給という文字が、はじめて消えたという驚きはその当時の農家にとって大きいものでした。

それにも拘らずこの本では自給の必要性を説き、戦後農政を支えて来た陰にイエと女性史がある事の意味をも語った。更に渡米し輸入果汁の現場を見て、〝山下家の農業は立ちゆかなくなる〟と決めるまでの訳を語る、ありのままの言葉に、私も助けられました。

それは平成七年の事。父が発病し原因不明の症状だった為、看病していた母までが体を壊して入院と、家族がバラバラになりそうな時期がありました。本当にその時は自分達の家業である農業の将来が〝見えない〟状態でした。頑丈だった父の病気は、難病とよばれるものだったのです。

「なぜ父が、この病気にかかってしまったのか。あの時もっと注意をしていれば―。」と思ってみても現実から逃れる事はできず、田んぼや畑へ行ってもその悔やむ思いは消えませんでした。

夕暮れ時、鳥達さえ巣に戻る時間になっても、家に帰る気持ちになれず赤く沈む太陽を見て〝私の代で農業を終わりにするのか〟と思う気持ちは、山下氏の苦汁の決断に近いものがありました。ところが、あのタイ米を家族で食べた感覚が、よみ返ったのです。〝農業は、命を守る大切な仕事なのに…。〟という想いで、何度も何度も読み続けました。

そして私は、父亡きあとの農業を、続ける原動力となる言葉を頂いたのです。（それからの六年間は、書く事をやめました。）

『自分を救うのは自分であり、自分たちを救えるのは自分たちである』という当たり前の自覚に立つ事だ。という言葉に支えられた私にとって、頼りになったのは自分と家族だったのです。幸いにも我が家には団らんの場がありました。そこで話し合い、明るい家族農業を目指すという意欲が私を動かしました。〝どんなに科学が進歩しても、コメ一粒・葉っぱ一枚作れない人間は、食べ物なしでは生きられないという現実〟それを肌で感じながら素直な気持ちで、自然に感謝しながら今まで米と野菜を栽培し出荷してきました。

すると、「この想いを書きたい」と思うようになった自分が、自分をつき動かしていました。心の目で、再びこの本を読んだ処、十五年前の暗さとは違うことが解ってきました。

『選択的拡大で自給を放棄した昭和三十六年』

～その当時に放棄された麦・大豆等が、今や自給率向上の目玉となっている～

『追いうちをかけた一家団らんの消滅』

～かつて個食・今は不況で食事を満足に取れない人もいる。安全と本物を求める消費者～

『転機を迎えた家族農業』

～専業農家ほど苦しい現状と、法人化の展望そして経済繁栄の果てに待つものは何か～

私は「それでは農業はどうなるのか」と問いかけました。そうすると、

―人間は、自然を傷つけたり搾取したりしてはならない。そうする事は命の基盤を破壊する事だ―

それは世界共通の人類史の教訓なのである。という答を返してくれました。

今、山下氏は「孫達へ、おじいちゃんの食と農の話」等々、世代間をつなぐ伝承者として、ご活躍されています。

かたや私は、ただ家族と楽しい農業を目指して来ただけでした。勿論天候や市場原理で泣かされる事もありますが、〝それでも農は命綱〟の心を、育む事が出来ました。

何よりも書く事を止めていた自分に再び〝書こう〟という気持ちを呼び戻してくれたこの本と山下惣一氏に、感謝致します。

〈講　評〉

ご自身の体験と重ね合わせて書かれており、「農」はまさに私たちを支える命綱であるということが読み手に強く伝わってきます。

同じ本を年月を経て読むことで新たな発見ができるということは、子どもたちにもぜひ伝えていきたいですね。

重い遺言〝日本の子どもたちへ〟

綴子　三澤昭彦

民話の知恵を探ろうか。と、図書館の子ども書架を廻る。小型文庫が、かくれんぼのようだが目に止まる。「日本にも戦争があった—②」だ。変だ、あ、子どもの頭では、日本に戦争が無いんだ。

見ると中学生を対象にしている。戦争は六十年も遠い昔だから、今や大人だって八十%は「戦争を知らない子ども」なんだ。

「三光作戦を知っていますか」とある。私は予科練の生き残りだから、日本軍が中国の村を襲った残虐行為だとわかっていた。語り継ぐ戦争では、たいてい被害者として空襲や引揚げの場面だが、これは、重大な加害者体験・読む程に体ごと引き込まれ、私は無知と思わせられた。中国の村人が三光作戦と名づけて恐れたのは、日本軍が八路軍掃討作戦と称し村々で行った残虐行為だった。

体験を風化させるな。と言われても、なかなか戦後数十年を経てようやく語る気になったと聞くとおり、真実を語る重さや責任を伴うからだ。坂倉さんは、恥をさらし責任や犯罪にかかわる事実を微に入り細にわたり語り切るのである。

中国の村人は、いつ襲ってくるかと日本兵を恐れ憎み「日本鬼子」と呼んでいた。中国人の身になっても見よ。日本の鬼どもは、まっ赤な口を耳までさけきり、するどい牙は、中国人の首をくだき、むすり取りガリガリ喰らう。まさに地獄の鬼と見えたことでしょう。

それを日本軍の隊長、命令で動く兵士たち恐怖の中必死に抵抗する老人女子どもを語り尽しているのである。

さて、「三光作戦」とは、と、中学生に良くわかる文となっている。すなわち

一、村人を殺しつくしてしまう。

一、村の家などすべて焼きつくしてしまう。

一、村の穀物家畜など食料を奪いつくす。

とても、人の皮をかぶっているとは、思われないやり方である。

八路軍がひそんでいると見られた村は、日本軍隊の宿営地にされ、大量に必要な食料は現地調達と命令され、取らないでと泣き叫ぶ女たちをなぐり倒し、すべて略奪食い尽くすのであった。

坂倉さんと高柳さんは、この軍隊用語・戦時のことば、歴史的語句などに、中学生にも理解し易く配慮し、たくさんの註釈をつけ、この本そのものが、「戦争早わかり辞典」といっていいくらいである。

場面は、多様な襲撃をあらわしているが、払暁攻撃をみると、空が白みかける頃「突っ込め」の命令、各家々の戸をたたきこわし、捜索する。物かげから銃声、一兵士負傷す。怒った隊長が叫ぶ「八路だ探せ」「村中の者、全員集めろ村長を逃がすな」

広場に集合させ「村長をしばれ」「八路は、どこだ」「隠れ場所を言え」「言わないと殺す」しかしだれも知らないという。隊長殺せの合図、岩佐一等銃殺用意「バーン」村長の頭がガクンくだけた頭蓋骨がボトンと落ちる。村人抗議の声銃を突きつけられ泣き叫ぶばかりだ。いとも簡単に人の命が奪われ背すじも氷る。隊長が「火をつけろ」と叫び村を燃やし尽くしたのだ。

坂倉、高柳両氏は、このすさまじい「極悪非道」の真実を余さず告白したのだ。それまで自分の罪を認めず「朕が命令は上官の命令だから絶対、だから従うのは、当然であり、罪はない。」と弁解したが戦争犯罪人に指定され管理所に収容された。「この下っぱの兵士が、何で戦犯なものか」と、ふんまんやる方なしだった。ところが、この収容所は、食べ物十分、強制労働なし、自主サークルの奨励、世界情勢、歴史などの学習をすすめられ、更に八路軍の軍規律を説明されて驚いてしまった。その一、兵士を何より尊重する。二、大衆を尊重する。三、捕虜を尊重する。なんと、日本軍のやり方とは、全く正反対の教えで鍛えられていたのだ。収容所の待遇が格別だったわけを納得したのだった。収容所の係官から「三光に襲われた中国人の苦しみ恨み家族の悲しみを、考えたことがあるか。どうか勇気を振り絞って自分の行為に責任をもち人間にもどってほしい。」と説得され、罪を告白し謝罪したのだった。坂倉氏は、なぜ日本兵は鬼になってしまったかを考え分析しています。

それは、子どもの頃からの軍国主義教育にはじまり生きた神である天皇をいただく民族優越論で中国人蔑視をし殺してもかまわないと思わせたのだ。兵役の義務で天皇のため国のため命を捨てることが最高の栄誉とされ朕が命令の強制が、兵士を金しばりにしたからだった。お二人の呼吸がピタリと合い真実が見事に浮かぶ。読む程に、深く、汲めどもつきせぬ、人間の生き方というものが、次々と湧いてくる不思議な語りであると感動を受けました。坂倉氏が力を込めて「子ども達よ、どうか私の遺言を受けてください。」と、子どもも大人も本を読みこの継承に力をと願います。

〈講　評〉

戦後六十年以上経ち、戦争の記憶の風化、世代間の隔たりを危惧する声が高まる中、「伝えなければならない」という三澤さんの強い意志が感じられる書評であった。

考えごとをしている 友だち
鷹巣小学校
2年　はたけ山　みのり